文法に拒否反応のある子

暗記するまで音読させよ

「聞く・話す」で英文法が習得できる

大正時代、ハロルド・E・パーマー氏（※）が提唱した、書物を使わず聞く・話すを中心とした教育「オーラル・メソッド」の実践校が、筑波大学附属高校（当時は東京高等師範学校附属中学校）。併設している中学校を見学してみると、その伝統を継ぎ、音を頼りにした授業風景は圧巻。先生も生徒も発音は抜群である。

「六月中旬までは、教科書も使いません。アルファベットは教えますが、ワークシートにも英文はありません。とにかく音だけを頼りに、英語を覚える。初期段階で徹底的に訓練するので、生徒の発音は、実際、教師よりもいいんですよ」と、筑波大学附属中学校英語科の肥沼則明先生。

同校では、英語の基本は「聞く」「話す」ことだと考え、授業では、とにかく音声練習を繰り返させる。

「聞いて話すことを、なぜここまで徹底して繰り返させるのかと聞かれます。その場ではできたような気がしても、授業が終わると忘れてしまうことが多い。繰り返しが大切なんです」

耳で聞いた英文を意識して声に出すことで、文法が自然に身についてくる。

「たとえば『私はテニスをする』は、英語だと“I play tennis.”。これをただオウム返しでなく、意味を考えながら繰り返し言うことで、まず『私』がきて、『する』がきて、『テニスを』と続くんだという、英語の語順が感覚的にわかってきます」

文法を身につけるには、とにかく教科書の音読をやらせることが大切だという。声に出す、という子どもが自主的にできる程度のことでなければ長続きせず、結局理解できなくなってしまうからだ。

「音のモデルがないと発音が適当になってしまうので、教科書に付随した市販のCDの購入をお勧めします。構文が頭に入るまで、あるいは基本的な表現が口から自然に出てくるまで、繰り返し声に出すこと。結果的に暗記できてしまうくらい、徹底的に読み込んでください」

復習の場合は、「リード・アンド・ルックアップ」法が特に有効だという。

「一文ずつ、数秒間読んだ（リード）あと、教科書から目を上げて（ルックアップ）声に出して言う。単純に暗記してもダメ。一文といえども、正確に覚えるには、構文も文法も意味もしっかりわかっていないとできません。繰り返すことにより、英語の構文を理解し、さらには、場面に応じた表現もできるようになります」

英語の学習は、時間や量よりも、自分がここまで言えるようになったという達成感が大切。また、「わからないことは、自分から質問する」ということも重要だ。それらを重視している肥沼先生の授業では、質問があるかと尋ねると、時には授業中にさばききれないほど手が挙がるという。さらに放課後や授業中にも、面接時間を設けているという徹底ぶり。ただ単に来なさいとは言わず、わからないところがあるときはと、とにかく主体性を大切にしている。

家庭でも、親がただ答えを教えるのでは、ヒントや助言を与えることで、子どもが受け身にならず、自分で考えるように促すこと。自分の力で理解したという過程が、深く印象に残るコツだ。

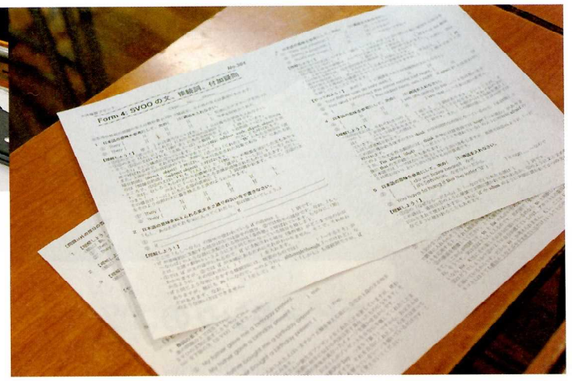
「どうしてそうなるのかを、論理的に考えさせてください。例えば、前置詞は本来の意味を理解しないと使えない。プレゼントをするという表現は、“give～to…”“buy～for…”というように to と for がありますが、to は到達点、for は方向性を示しているという本質を理解することが大切です。to の場合は『～に（与える）』、for の場合は『～のために』と訳しただけでは、判断に迷ってしまうのです。そちらに向かっていれば for、到達していれば to。ここで『どうして for と to があるのか』と疑問を持ち、調べて、感覚的に理解することで、英語ができるようになります。単純に日本語の訳を覚えるだけでは、応用が利きません」

意外にも、学生時代は理数系で英語が苦手だったという肥沼先生。「自分で考えていくうちにわかってきたという経験が多々あるんです。それを生徒にも体験させたい。だから常に疑問を持たせることを心がけています」

パーマー氏のメソッドと先生方の知恵を集結した同校のユニークな英語授業。生徒たちは、入学準備説明会からその洗礼を受ける。毎年英語科の先生たちによる、英語寸劇が行われるのだ。ここで使うセリフは、一年生の一学期で習う構文を使ったもののみ。この英語寸劇を録音したものを三カ月後にもう一度聞かせるという。

「入学準備説明会では、初めて英語を耳にして、きょとんとしている子もいます。でも三カ月もたつと、全員がセリフを聞き取れるようになっているんですよ」

こんな先生方の行う授業なら、次にどんなものが出てくるのか、生徒も楽しみだろう。肥沼先生も、現在担任をしているクラスではまだ登場していないという、スピーキングの相棒、腹話術人形のケンちゃんを片手に、いたずらっぽい笑みで見送ってくれた。



同校の授業は、パーマー氏が提唱したメソッドを取り入れ、英語科の先生たちがオリジナルで作成したプリントに沿って進められる。取材時に見学したのは中学2年生のクラス。入学してから初めて英語を学ぶ生徒がほとんどというが、ネイティブ並みの発音に驚く。

教科書は『NEW HORIZON』（東京書籍）と『ONE WORLD』（教育出版）を各学年とも並行して使用。生徒は付属CDで発音を確認し、音読練習をする。ネイティブ講師を迎えての授業でも積極的だという。

※ハロルド・E・パーマー氏（1877～1949年）は、イギリス出身の英語教育学者。1923年に文部省内に日本の外国語教育改善のために設置された、英語教授研究所（現・財団法人語学教育研究所）の初代所長。氏の没後、功績を記念して「パーマー賞」が設けられた。

耳で聞いて、声に出す

筑波大学附属中学校
肥沼則明先生

浦上和雄＝構成　大森大祐＝撮影